

伊勢湾流域圏の再生シンポジウム－Ⅳ アピール

わが国では、自然と向き合い、自然資源の恵みを社会に提供し続ける持続可能な生産が、漁師（あるいは猟師）、林家、農家などの生業として成り立っていた。しかし、これらは、高度経済成長期を境に衰退が目立つようになり、持続的に生計を立てることが厳しくなってきた。このような持続可能な生産は、今や消えゆく運命にあるのだろうか。しかし、そうすると、それによって伝統的技法等の自然環境のなかでの持続可能な生産様式が消えていき、風土に合った生活資材の豊かさも失われていく。また、人がきめ細かく手を入れることによって守られていた自然の豊かさも、自然とふれあうことによる感動も失われていく。

この持続可能な生産と消費が消えて行くことは、現代文明の進展によって避けられず、受け入れざるを得ない流れなのだろうか。それとも、その流れを押し戻すことへの価値や意味を見出すべきなのか。そして、それはいかなる視点や方法によって可能なのか。国や自治体の政策、NGO や個人の活動、創意工夫、それを後押しする仕組みや消費者による支援はいかにあるべきか。本日のシンポジウムではそうした様々な問題意識を持ちながら論議がされた。

こうした問題意識から視野を広げてみると、異なった光景が見えてくる。

1992年の地球サミット以降、国際条約は「持続可能な発展」をキーワードに、気候変動、生物多様性の劣化はともに人間社会の行き過ぎた生産と消費に起因することを確認し、後戻り出来ない状態に達する前に、予防的かつ大胆に対応する必要があると勧告してきた。2016年から継続してきた本シンポジウムは、そうした勧告の一つである生物多様性条約の「愛知目標」を地域レベルで受け止め、実現することを目指して始められた。21世紀の後半に世界のCO₂排出量をゼロにするという大胆な合意に表れてように、今や地球社会は「現代文明の野放しの進展」を抑制する時代に立っており、その対応が遅れば遅れるほど、未来の選択肢が狭められるとの見方が世界の標準である。

本日のシンポジウムでは、様々な形で「現代文明の野放しの進展」を押しとどめる創意工夫・覚悟、制度と仕組みのあり方が紹介された。それはいずれも自然環境のみを対象にするものではなく、第一次産業、食等生活の楽しみ、子育て・働き方、観光のあり方等を広く包んだ力強さがあった。またアメリカやイタリアにおいて地域や国レベルで同様の趣旨の統合的で前向きな取り組みがあること、伝統の再発見と現代的な再生の取り組みが基調に流れていることも確認した。私たちは、風土に合った持続型社会を営んでいた経験を思い起こし、今こそ開発型志向を大きく軌道修正することを訴える。